

4-1					
主題	「その人らしい人生のステージ」を活用した、看取りケアの取り組み				
副題	職員とご家族がともに同じ方向を向いて、その方の人生の最期の時間を一緒に過ごしていく				
キーワード 1	看取りケア	キーワード 2	ケアの向上	研究(実践)期間	12ヶ月

法人名・事業所名	社福) 親和福祉会 特別養護老人ホーム 小松原園
発表者(職種)	鈴木陽一(施設ケアマネジャー)
共同研究(実践)者	医療的ケア看取り委員会

電話	042-654-8331	FAX	042-654-8330
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	<p>東京都八王子市にある、平成10年4月開所の特別養護老人ホームです。</p> <p>平成24年4月に新たに20床増床し、定員117名・ショートステイ6名、計123名の従来型の施設です。</p> <p>「親和」、「利他のこころ」を行動指針とし、ケアを提供しています。</p>
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

以前から看取りケアには取り組んでいたが、どのようなタイミングで看取りを意識する必要があるのか、手探り状態だった。

“看取り”に対して職員間でも意識にバラツキがあった。

また、ご家族でも認識に差があり、実際に看取りケアを開始し、こちらが状態をお伝えしてもご家族によってとらえ方がバラバラで、もっと理解しやすい方法やツールがあれば良いと感じていた。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

職員とご家族双方にとって、看取りに対して共通の認識となるツールがあれば、意識の差も解消されて、同じ方向を向いてケアに取り組めると考えた。

そのため、職員、ご家族、双方にとって理解しやすい内容にした書面を作成し、周知を図っていくことが、今回の課題の解決につながると考えた。

《3. 具体的な取り組みの内容》

医療的ケア看取り委員会を月に1回、毎月開催して検討を重ね、その人の生活上や食事等の様子を踏まえ、「安定期」「低下期」「終末期」「旅立ち」の4つの期に分け、「その人らしい人生のステージ」と名付け、書面にして、状態を見える化した。

ご家族にはカンファレンスや家族会等にて内容の説明、職員には職員研修という形で書面の説明を行い、周知を図った。

《4. 取り組みの結果》

職員、ご家族ともに「その人らしい人生のステージ」についての説明を聞いて、意識に変化があったか、アンケートを実施。

職員に関しては、36 名中、実に 33 名の職員に何らかの意識の変化があったとの回答を得る事が出来た。

ご家族からも“分かりやすい”“家族ができる事も書かれているのは、ありがたい”“これをもとに家族で看取りについて共有したい”などと、良い返答をいただくことができた。

《5. 考察、まとめ》

「その人らしい人生のステージ」を活用することにより、職員にとっても、その方の状態の一つの目安となり、ご家族にとっても、施設側の話と照らし合わせて、いま、どのような状態であるのか、また、今、どういったことをすればいいのかを参考にすることができ、お互いに同じ方向を見据えて歩んでいけるツールが出来たと考えられる。

今後の課題として、食事や実際のケアに活用していけるよう、さらに内容を精査していく必要があると考えていることと、年間でおおよそ 30 名程度の方が、ここ数年間は入退所していることから、ご家族への周知は定期的に行っていく必要があると考えている、

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

「はじめてでも怖くない 自然死の看取りケア 穏やかで自然な最期を施設の介護力で支えよう(もっと介護力!シリーズ)」(2013年)メディカ出版

「看取りケアの実践を通して日常のケアの向上につなげる」(老施協MONTHLY 2021.8)

「介護現場で使える看取りケア便利帖」(2017年)介護と医療研究会

《8. 提案と発信》

今後、自分らしい生き方を追求し、延命ではなく、看取りを希望する方も増えると予想されています。

入居者ご自身はどのように最期を迎えたいのか?ご家族間でも理解を深めておく必要がありますが、私たち、施設側の職員も同じように知識や理解を深めておかなければならないと考えています。今回のこの発表が、そのきっかけになればと思っています。